

未来に向かって伸びる鶴嶺の子

鶴小だより 12月号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
校長 日高 大司郎
令和5年11月30日発行



黒子のように・・・

OECDは、「2023年に向けた学習枠組み」の中で、「VUCA」(不安定・不確実・複雑・曖昧)が急速に進展する世界の中で、学習者が発揮するべき力を示しています。それは、Agency(責任主体性)・自分の頭で考え、自分で判断して、自分で行動を起こす力と学習枠組みの基礎となる概念としてCo-Agency(共働主体性)・まわりの人と分かりあって、協力し合いながら進める力という2つです。この2つの力は、日本の乳幼児教育の中で、育成することが大切だと盛んに言われてきた**非認知の力(=自己の力と社会性の力)**ととても近いものです。日本はもとより、国際社会からも重視されているこの非認知の力とは、どのような力で、どうしたら育成ができるものなのでしょうか。

以前お話を伺った東大の遠藤利彦先生は、非認知の力のうち自己の力について、「自己」にかかわる心の性質だとしていらっしゃいました。これは、自分を大切にし、自分を律し、自分を高めていく力です。自尊心とか、自己理解とか、自制心、自律心などということになりましょうか。では、社会性の力の方はどうでしょう。こちらは「社会性」にかかわる心の性質とおっしゃっていました。集団の中に溶け込み、人との関係を作り維持していくための力です。心の理解能力だとか、共感性とか、協調性、道徳性や規範意識ということになります。また、この2つの側面にかかわる「感情の制御・調節」の力も非認知の力の中に含まれます。

この非認知の力の育成を考えた時、何か特別なことが必要なのではと思われた方がいらっしゃるのではないのでしょうか。しかし、それは間違いです。これらを発達させるのは、「**家庭内外の安定した大人との関係**」です。

この「関係」を理解するのに、大切な考え方として「**アタッチメント**」があります。私たち人は、何らかの危機に接して、恐れや不安などのネガティブな感情を経験した時に、身体的な意味でも、あるいは心理的な意味でも、誰か特定の人にくっつきたい、近くにいたいと強く願う欲求があります。そして現にくっつくこうとする、近づこうとする行動の傾向を「アタッチメント」と呼びます。人が生まれて1番最初に身に付けるべき心の土台は、「自分は愛してもらえる、愛してもらえるだけの価値がある」という感覚と、「人は信じていいんだという感覚」ですが、この心の土台を育むために、この「アタッチメント」は非常に重要なものだと言わ

れています。

それでは、このアタッチメントの考えにもとづいて、僕たちがすべき大人の役割を見ていきましょう。その役割とは、「安全な避難所」の役割、「安心の基地」の役割のふたつです。

「安全の避難所」とは、子どもが、恐れ、不安と感じたり、感情が崩れてしまったりした時に、大人がしっかりとそれを受け止めて、元通りに立て直してあげる、そして安心感を与えてあげる役割のことです。**(その原因を排除するというではありません。念のため。)**この経験を日常的にくり返すことで、自分は「安全の避難所」で必ず守ってもらえる、何があっても大丈夫という、確かな見通しをもてるようになります。

一方「安心の基地」の役割は、いったん、恐れや不安から立ち直り、安心感に浸った子どもたちの自発的な冒険や探索、様々なことへのチャレンジについて背中を押し、見守ることです。

「家庭内外の安定した大人との関係」とは、安全基地(大人のもと)から自発的な探索・遊びに出かけた子どもたちが、危機との遭遇(恐れ・不安・欲求不満等のネガティブな情動経験)があった時、安全な避難所(大人のもと)で感情の立て直しをするという、至極あたりまえの関係のことなのです。この関係は、子どもが出かけて、もどって、また出かけてと輪のように行ったり戻ったりするので、「**安心感の輪**」と呼ばれます。

保護者の皆さんには、この2つの役割を意識していただきたいと思っています。そして、**子どもが求めているのに、先回りや干渉をして、子どものためになるのだからと手を出すのは、よくないことだ**と肝に銘じて欲しいと考えます。子どものシグナルに敏感であるのと同じくらい、シグナルを発していない時は大人が踏み込まないということが本当に本当に大事なことです。

大人が踏み込み過ぎると、子どもの自己の発達に影響を与えかねません。なぜなら、子どもが不快な気持ちになったり、困ったりすることが少なくなり、自分の不快な状況、困難な状況をなんとかしたいという気持ちや、それに基づく自発的な行動が経験されなくなるからです。結果的に自律心の発達の芽がつかみとられてしまいます。**適度にフラストレーションを経験し、それを子ども自身の力で跳ね返す体験をさせていきたい**ものです。

大人は、どっしりと構え、子どもが求めてきた時に**情緒的に利用可能な存在**であればいい、お芝居の黒子のように子どもが思いきり生きられるように、陰で支える人であるべきだと思います。